

心が挫けるとき あなた(神)を呼びます

まず、詩編 61 編の本文を読みましょう。できれば「朗読」します。

信仰者は、神に向かって叫び、祈り、呼びかけます。人はどのような時に、何を訴えて神に向かうのでしょうか。この詩を読んで心に残る箇所の一つに「心が挫けるとき」(口語訳「わが心のくずおれるとき」)という表現あるいはこの表現の背後にある人間の姿があります。物事が旨く進まない時、自分の無力に直面する時、イライラし、他人や自分自身に怒りや嘆きが向いて、神には向かいませんが、結局、最終的には、人は神に向かって叫び、祈り、呼びかけるのでしょうか。人間の内面は「知・情・意」から構成されていますが、情も重要な部分です。自分の情を受け留め、神に向かって解放しましょう。

1. 詩の先頭の言葉は「(私の叫びに) 聞いてください」です。次は、「(私の祈りに) 耳を傾けてください」(心に留める、留意すること)、そして、「私を導いてください」です。これらの懇願の中に、「わたしの心が挫けるとき」(ba'aätöp) が生じています。「アータプ」は「覆われる」(covered, overwhelm) という意味で大水などに飲み込まれること、状況に翻弄され、混迷するというような意味から、元気のない、弱い、挫ける様を意味します。「地の果てから」も興味深い表現です。なぜ、「地の果て」なのでしょう。万策尽き、精魂も果て(「果て」という表現ができました)、孤独で一人取り残された感じなのでしょう。それに対し、「自分より高い岩へと」導いて下さいの表現も面白いです。日本語訳は少し大げさでしょうか

2. 神はわたしの避けどころ、力強い塔、幕屋、鳥の翼の下の隠れ場を信頼するという表現はこれまでも度々登場してきた慣用句です。しかし、私たちを護り、匿う場所があり、信頼できるお方があることは慰めに満ちたことです。

3. 「継ぐべきもの」(6 節)

神が御名を畏れる人に継がせるものとは何でしょうか？ 私たちは親から何を受け継ぎ、神から何を受け継ぐのでしょうか？ 「嗣業」という言葉に私が出会ったのは、聖書においてであったと思います。イスラエルの場合は「嗣業」は神から賜った仕事というより、そこで生産物を生み出す「土地」を意味しています。たぶん、日本語ではあまり使わない言葉でしょう。普通は相続財産、先祖伝来のもの、遺産という表現です。

4. 王のための祈り (7～8 節)

7～8 節は王への護りと祝福を祈る言葉です。権力・武力による支配を含むイスラエルの「ダビデ王国史観」には諸手を挙げて同意できません。イエス様は「ダビデの子」という呼称を必ずしも喜ばれませんでした。むしろ、「人の子」を用いられ、「苦難の僕」の道を歩まれました。なぜ、人は「皇室」や「王」を喜ぶのでしょうか？ 英国教会は国王または女王が教会のトップとされていますので、彼等彼女らのために執り成し祈ります。私たちは政治的、社会的指導者たちのために祈るのでしょうか？ むろん、

絶望せずに、正義と慈愛で民衆を治める指導者の出現のためには進んで祈るべきでしょう。彼等が「神の前に」座すものであるように祈るべきであるし、また、そのような人を立てるべきでしょう。「慈しみ（ヘセド）とまこと（エメト）」に守られますようにという表現も慣用句ですが、重要な内容です。

5. 神賛美と感謝（9節）

神の「名」（人と関り、語り掛ける神）をとこしえに賛美し、「日ごとに」（yōwm yōwm, day by day）感謝の捧げもの（祈りが応えられたことへの）への約束（誓いを果たすこと）で詩は閉じられています。私たちにとって大切なことは、神賛美と日ごとの感謝です。